

増田寄郷拾箇村

絳殿村

里長 又兵衛

古保郡邑記、縫殿開村開字ヲ除カル家員立軒向川上  
東立雄勝郡荻野袋村ト田子内村川ニ境同下東南ヨ同郡熊野  
渕村ト田子内村ニ境田子内村稻庭川當地形内ニ落合慶久長  
年中升田村住居小原藏人先祖開發雄勝郡内平鹿郡入文  
分ナ無ニ雄勝郡田地ハ熊野渕村支御分ル平鹿村ハ増田村支御分ル之  
立輪羽場村家貞廿二軒昔立輪有之故村名ニ唱スハ雄勝郡ニ  
東ハ雄勝郡熊野渕村田畠入合南ノ同郡三ツ又村ト川ニ境西ノ同  
郡戸波村ト稻庭川ニ境ナニテ此立輪羽場村立木を雄勝の  
郡の地也ト云田子内川流々して今ニ縫殿村ニ屬マクシテ  
立輪羽場村古姓立輪石ヲ掘リムナモ此名ナリケレバ

年子の兄弟のバソのサク誰が立輪ありとあんまり

### 通覚寺

東流山古ハ藤柳通覺寺ハ東本願寺寺直末寺オテ開基  
釋祐讚俗姓ハ藤原オテニ藤氏某もとの本山ハ世トあらん  
蓮如上人小謁トすて侍弟子トア法名を祐讚ト付給、其時侍自  
筆の六字の名號を授典トゆかて後長亨年中雄勝郡猿半  
内ト村内ト河口トふ地ト創めて一字の佛刹を建タマせりて後半び  
増田の関口ト處へ遷トて其寺にて、永正十五年庚寅七月廿  
二日述化トニ世祐念住職の年月不詳天文八年己亥三月二日  
化ト三世祐安住職年月不知レ、永祿五年壬戌六月七日化  
四世祐明住職年月不知天正十五年丁亥十一月廿五日化

立世祐續此立世間増田村の関口の住居トレバ慶父長十六  
年辛亥某月小原縫殿之父吉実ノ母妙教禪尼志願トモ  
今ハ縫殿村ト移リ一字再建ト慶長十八年癸丑八月七日化ト六  
世祐西住職元和年中本山十二世教如上人侍影堂而建立ト付て  
累年在京ト勤労の功ト賞ト給ひて真向の尊像を祐西ト授  
ケ給ト寛永十六年己卯正月廿二日化ト七世祐徳住職年月不知  
横手ト西誓寺ト連枝祐西ト養子ト延寶四年丙辰五月八日化  
八世祐圓住職中寛文ト辛亥年寺號侍染筆并領同土ト  
年小木像本尊頂戴延寶二甲年宗祖真影頂戴同三年六  
上宮太子七高僧ノ真影頂戴皆是足寄進主河村正左門夫  
婦法名了圓妙壽ト祐圓貞享三年丙寅十月廿日化ト九世

祐存住職年中不詳元祿十三年庚辰八月廿日化 十世是三住職  
年中不詳享保二年丁酉六月廿日化 十一世祐信住職年中不  
詳正徳三年癸巳二月廿日化 十二世祐玄住職中正徳四年蓮  
如上人真影頂戴同六年龕中安置櫈間出仕沛免享保十五年  
庚戌四月廿日化 十三世祐天元文三年庚午年本山継目位沛免  
寶曆年中殿堂庫裡大門建立同十三年癸未七月廿二日  
化十四世天瑞住職中明和八年鑄洪鐘妥永二年癸  
年本山継目飛櫈位沛免寛政年中庫裡再建文化  
十<sup>癸</sup>年境内鎮守聖德太子堂建立享和二年壬戌閑  
居于今存生十五世祐寬現住 寛政十年庚午年本山飛  
櫈位沛免享和三矮年入院

小原縫殿、父吉実、母釋妙教禪尼、元和二年丙辰十一月廿八日  
縫殿、父吉宗、寛永十三年丙子九月十四日卒法名慈得院曼  
英宗清居士也。又、小田縫殿、父吉実、弟奥利和賀ノ城主  
多田薩摩守義忠の家臣。又、永慶軍記卅五卷ノ中ニ  
多田亦次郎病死して亦四郎一人ナリ。又、小原左馬从  
筒井縫殿、父猿擣、孫八三人の外、子一又、孫一有り。  
名ケルモ氏、名トシモナサエリ。もさうひしやあ。

ハ王のき事二

大享保郡邑記ニ家昌四拾一軒南東ハ雄勝郡戸波村ト大川  
テ境寛文十三癸卯年郡奉行見分ト土民云大川下同郡岩崎村  
草川山境八大川中同断云々ハ木占地名氏主、もの名々  
之々傳名抄近江國愛智郡八木拾艾抄宿祢部尾張又船木  
八木云々秋田郡小八木檣<sub>ヤナギ</sub>氏主也云々八木ハ木ノ末ノ字を  
割<sub>ワケ</sub>て村名ト云々あく<sub>アカル</sub>う事は未<sub>ハ</sub>アリ玉勝間<sub>ハシマツ</sub>六卷ハ木  
系<sub>ハシメ</sub>ハ木ノ末<sub>ハシメ</sub>云々見之<sub>ハシメ</sub>久矣久保田小八木氏<sub>ハシメ</sub>此ハ木氏<sub>ハシメ</sub>但  
馬宿称後胤<sub>スコ</sub>八木<sub>ハシメ</sub>左衛門尉某<sub>ハシメ</sub>其<sub>ハシメ</sub>佐竹昌義公常陸國  
小入<sub>ハシメ</sub>給<sub>ハシメ</sub>之<sub>ハシメ</sub>皇都<sub>ミサト</sub>仕<sub>ハシメ</sub>一家士<sub>ハシメ</sub>而家隨<sub>ハシメ</sub>の家<sub>ハシメ</sub>

海草シマノリハ本ヤナギより、谷本ヤカニ出ヤキ是譚海シマツハハ本ヤナギよ  
の相川三浦の海邊シマヘン小出コハタも奇怪の形ヒメ、良の事ヨシと去スルたる真の  
如シテ又多ハシい鰯イシモチで編ハサウて、にして紅花の色レッド一ニ尺三尺イチニチツ及スル  
のあうす海庭シマノミ小出コハタ物モノにて席シマツ下シマツ置シマツて就シマツぶシマツ、漢綱カンメイ  
が足取シマツ、損シマツト安シマツ、全形シマツのまゝ、水シマツ潛シマツ入シマツ、  
水シマツ中シマツて、栗シマツ、勿シマツ水シマツを、數シマツ、鉢シマツか、また、鉢シマツ、根シマツ、  
石シマツを帶シマツす、ア、シマツ、也シマツ、物語シマツ、ハ本ヤナギ、シマツ、いシマツ、  
シマツ、ハ本ヤナギ、古柵シマツ、シマツ、いシマツ、小笠祭シマツ、義父シマツの居城シマツ、也シマツ  
シマツ、義冬シマツ、貞治シマツの年シマツの人シマツ、仙北郡金澤シマツ、八幡宮奉納書シマツ、  
大般若經シマツ六百卷シマツ、卷シマツのまゝ、貞治四年七月日大願主覺淳取筆  
小笠祭シマツ、義冬シマツ、四十六歳シマツ、シマツ、あまシマツのシマツ人シマツ、あまシマツのシマツ人シマツ、  
経シマツ、已シマツを

ま、少鉢シマツす家シマツの武士シマツ、小八本藤兵衛シマツ、ソ、見シマツそ

寶龍權現シマツ、法良社シマツ、祭日九月九日別當田シマツ此村シマツ、  
小倅別當シマツ、シマツ、小男子シマツ、七八歲シマツ、十四歲シマツ、是シマツとつむ  
十六歲シマツ、小男子シマツ、ハ、こ、童ワラ、が、ホ、ゆ、つ、ま、れ、  
そのま、後シマツ、伊勢シマツの、お、子シマツ、良シマツ、子シマツ、仰シマツ、ま、こ、外シマツ、不シマツ、ま、ら、  
水神シマツ、社シマツ、祭日四月九日、別當御役人シマツ、ま、とつむ

田シマツ字シマツ地

上シマツ河原シマツ、多シマツの、あ、  
サキシマツ、ひ、  
上シマツ八本シマツ、  
川原シマツ、八本川原シマツ  
い、  
田シマツ、字シマツ地

清小手

通小手

さあひ

田中

家貲四拾七戸 人數三百廿四人 馬貢廿六足

此色小佐藤長左衛スミヤシロ舊き家有スミヤシロ新家スミヤシロ傳スミヤシロ家譜スミヤシロ至スミヤシロ此奥スミヤシロの事スミヤシロ

大般若

大般若經卷第廿九

出羽國平鹿郡八木邑佐藤長左門 家系 越後國

出羽の平鹿郡より來立代及ぶ

佐藤家代スミヤシロは車スミヤシロ文字スミヤシロ付スミヤシロ当代スミヤシロ地車スミヤシロ画スミヤシロ

丹波サ将スミヤシロ花色地小車スミヤシロ文字スミヤシロ白スミヤシロ塗スミヤシロ一

馬スミヤシロ幡スミヤシロ立物スミヤシロ花籠スミヤシロ花薄スミヤシロ幡スミヤシロ一幅スミヤシロ白スミヤシロ布スミヤシロ紅色スミヤシロ

紋スミヤシロ金色スミヤシロ一

幕スミヤシロ紋スミヤシロ琵琶スミヤシロ是スミヤシロ錦足公スミヤシロ丹波公スミヤシロ一

一スミヤシロ以スミヤシロ佐藤家代スミヤシロ付スミヤシロ幕串スミヤシロ七本九本十二本スミヤシロ

右之條スミヤシロ為スミヤシロ奉事間以スミヤシロ相傳スミヤシロ有スミヤシロ聞スミヤシロ者スミヤシロ拙者スミヤシロ大一之卷物スミヤシロ

候スミヤシロ是スミヤシロ他スミヤシロ有スミヤシロ矣スミヤシロ止スミヤシロ

佐藤主計尉藤原忠秀スミヤシロ

永久元年七月十日

佐藤敷負大子藤原忠秀スミヤシロ

佐藤丹波守藤宗忠兼殿

淡海公是より開八列七藤ノケル 濱ノ藏王

佐藤庄司信秀をまの藏王十六代の後胤奥列立十郡の大將一居城則仙代之嫡女泉三郎嫁ス子二人あり

二女藤原高師嫁ス子四人あり

佐藤三郎兵衛尉次信源平合戦十義経公能登守の侍手小侍命あやかゝるき次信重馬の前小かけうさぎて死す

子一人即長田力秋信十八歳にて丸山一戦のとき大將より丸山の居城追討十九歳ノ時仙代伴達二郎追討也

佐藤四郎兵衛尉忠信兄三郎兵衛次信八嶋翁の浦にてち死の弟能登守を一矢うちやさんくにつけり終焉

また佐藤守内宗王と名號出づるはあせりて此よりハ  
ゆゑむうち先て兄次信の靈前より向まへて四人張二十四束引ひ  
矢のかの弓のじく口で血けず立て射す其時能登守宗王が  
首を捕らせて上六帯をえとて船底へ投入されとき死びて初定  
吉野山にて覺範をうち捕一事日ゆくからぬか一人あり

嫡男義忠十六歳にて義信同前より丸山一戦回大歳

伴達次郎を追討也

嫡男

佐藤太郎忠清仙代綱宗公開京一戦のとき伴達居城仍有  
之佐藤の一家より名號奉るより年達兵部少佐ニモア  
二男も別佐藤の家を繼ぎ是より而今佐藤分れ来る

二男

佐藤忠光 畜男佐藤兵庫守忠明居城仙代

三男 佐藤藏之亮忠定 遊前乱國の時守人トテ

関東より佐竹冠者少帝奉公其頃一万石ニ

嫡男 佐藤源左衛門尉忠恒同國ト住ス

嫡男 佐藤源十郎尉忠吉同國ト住ス是より佐藤  
源左衛門尉忠宣子継き未久代に佐竹ト居まひニ

佐藤帶刀尉忠政青野ケ原合戦淺野筑後守藏元を  
追討一至八ヶ越中の國アシ下西ニ感狀所持ニ

佐藤主馬尉忠行同國ト住ス

佐藤主計尉忠藏越前そ立白石大閣朝鮮陣立の席  
セ一歳ノテ俸供三千石侍感狀アリ

佐藤鞍負尉忠秀サレシテ穿入トテ最上ト住ス

佐藤丹波少忠三郎 国國ト住ス采澤影勝公遊後一戰の

砌成田帶刀ヒ打光ニ 永文四年丙寅四月七日ニ

佐藤平藏尉忠友 庄内ト住ス

佐藤主膳尉忠閑 同國ト住ス

佐藤民部尉忠父 サキナカニテ穿入ト有ス戸津能登守殿

ナハ白石トテ侍まひニ

佐藤平左衛門尉忠房 广津御登守殿一室トテ穿入ト

成りて仙北ト住ス

佐藤平兵衛尉忠光 同國ト住ス

佐藤清左衛門尉光信 生羽仙北内角館百石ミテ住ス

信濃守殿百二十石ヲテすム代に今ト在リ

稿男

佐藤次左門尉 因國小住

故平地車セイヒツはまくのとんのとくハ

琵琶ニ李細羊卷物タケシヤウモンハ

古ニ傳ト佐藤家代、如此経来ル一家一門からもお  
ほの秘事ニせ間、佐藤を名來者數名有ミテ  
此下其不ハサム、右來り來者是かハ佐藤の名宇  
可考者也者ハシマリ以上

佐藤丹波少三藤宗忠兼印

寛正四カナヒジ歳四月六日書之

佐藤平藏尉藤宗忠友殿

也見えハシマリて、かくも重ハシマリて、言福即ち

二井田村 里長 石川仁左門

享保の年カニ新田ハシマリ書キ、六郡カニ内ハシマリ新田ニ井田仁井  
田ハシマリ、いゝ多タ、此ニ井田の西、方ハ岩崎川中ハシマリ境ハシマリ、  
神社

新山權現社 祭日 六月二日別當増田村修驗圓滿寺  
稻荷明神社 祭日 九月九日別當 並因ハシマリす

田地タドヨ字

久毛津の柳ハシマリ又ト久柳ハシマリ、木村の方ハシマリ在、  
増田村八木村ニ井田村入會ハシマリ地ニ、久りの古事津ハシマリ、

事、また神ハシマリ、座マレて供物ハシマリ、御ハシマリけまつり、宝ハシマリ、  
大通東オナミチ、村北五戸ハシマリの各あり

十王堂村の南ハシマリ在、禪刹ゼニヤク、  
柔門寺誰ハシマリ、  
住

職リ

総家數立拾戸 人貞二百四十八人 馬數十九足

產物

二井田笠 二井膏とすり 六郡の土毛をもまいの番附シマツにて  
出アリ小二井笠アリ二井田膏藥アリ山内氏の家傳アリ金傷切アリ  
瘡アキスの痛アリ止メスの妙アリともに軍中アリ用藥アリて多く金瘡アリ  
此山内氏アリ永慶軍記アリ小肥二郎アリ四郎アリ等アリ山内主殿アリ安郭  
立郎左門アリ山宗宗左衛アリ先アリしてと已アリ此山内主殿アリ後胤アリ  
山内孫アリ今アリ家アリ上祖アリ持アリ古地福古書アリ  
さう御アリ之アリ宋源九郎義經アリがアリてとまアリがアリまアリこアリ  
書アリ一アリのちアリ墓アリて此奥アリ載アリ是

平鹿郡 二井田邑 山内孫主門家藏

系譜

往昔增田先祖徒鎌倉而下著之砌阿野澤田殿土肥  
山内四人子下アリより之を傳アリ譜代五代アリ老祖  
為東家アリは一族アリ而ふて多退転アリ

時次後幕 文居帝子 幷査アリ赤枝アリ左興  
余又一伐アリ良川聖澤アリ右興 山内加駕興アリ  
考究アリ一アリ自前代 衣衣定アリノサケアリ也

元龜三年大治十二月壬申テアリ吉日アリ

文 藤原朝臣 山内

湧友三右衛門尉

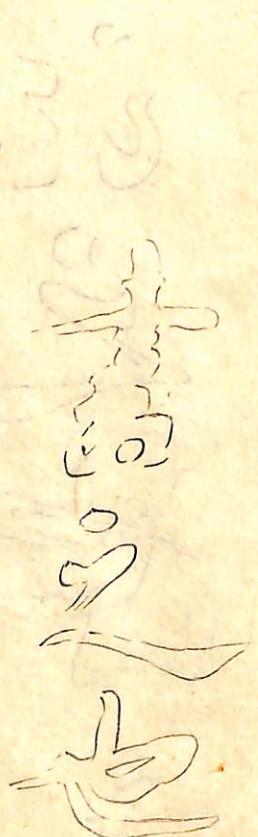
光宣實

任之

文永三月 天祐 壬申 二春 吉日

此家々ハ惱宮の夢想にて陣中小金瘡愈ル  
膏藥て兜の鉢にて煉う今此家の婦女  
傳之シ松竹妙手膏藥にてリテ  
又九郎ノ裁経いま、丑居廢ヨシキミスカタトスナリ  
山内入兵十二歳の筆にて一巻行ヨリ摹ヨリ之モ  
此君稚ヨナナくかひすと絵エバハまマ語ヨリ行ヨリじ

吉日



This image shows a single page from an old manuscript. The page is filled with two columns of text, each consisting of five lines. The characters are written in a fluid, cursive script that appears to be a form of early printed or handwritten Chinese. The ink is a dark brown color and is applied with varying degrees of pressure, creating some shading and texture. The paper itself is a light beige or cream color, showing signs of age and wear, particularly along the edges where it has turned a darker shade of tan or brown. There are also some faint, illegible markings or smudges visible in the background, suggesting other text or drawings that are too faded to be read.

A vertical column of six stylized, symmetrical line drawings, possibly representing a deity or a decorative motif, arranged vertically from top to bottom. The drawings feature intricate, swirling patterns and organic shapes, rendered in a simple black ink style on aged paper.

The image shows a single page from an antique manuscript. The paper is a warm, yellowish-tan color, showing signs of age and slight discoloration. It features twelve distinct characters, each composed of several strokes. Below each character is a thin, horizontal black line, which serves as a guide for the direction of the strokes. The characters are arranged in three horizontal rows, with four characters in each row. The script is fluid and appears to be a cursive or semi-cursive form of a traditional East Asian alphabet. There is no accompanying text or explanatory material on the page.

$\leftarrow \rightarrow$

3  
2

四  
四

九  
月

10

○ ○

○ ○

○

卷之三

初

13

卷之三

20

方  
元

A decorative initial 'P' at the top of the page.

乙  
三

卷之三

88

好  
好  
好

၃၂၁

乙 丙 丁 未 申 亥

爲  
爲  
爲  
爲  
爲

० ० ० ० ० ० ० ० ० ०

四  
五  
六  
七

此御曹司丑苦齋の書<sup>イシ</sup>由来ハシのうち少くほん陸奥の國一城  
の主<sup>ミツ</sup>に河賴ま太納<sup>トナ</sup>公基<sup>ヨシキ</sup>より高<sup>タカ</sup>帝<sup>テイ</sup>の僧領主<sup>トク</sup>領地<sup>リ</sup>のわ<sup>ヒ</sup>にて  
娘三人<sup>ミツコノ</sup>あひてひきひいて出<sup>ハシ</sup>の國<sup>ミツコノ</sup>までもるをれが嫁<sup>マダラ</sup>と嫁<sup>マダラ</sup>一め  
ま<sup>サ</sup>てニ子東郡<sup>ヒガシ</sup>増田<sup>マツダ</sup>紳<sup>シン</sup>山内氏<sup>ヤマツチ</sup>嫁<sup>マダラ</sup>一め<sup>アメ</sup>アメ<sup>アメ</sup>アメ<sup>アメ</sup>アメ<sup>アメ</sup>

城主ノ内使ちて又一飯一餘の時記念とせり若林の書  
一巻とま女の名とふ字一もうてはまをいづくも巻中の年号と  
丑若ちあや吹き衆もかう此大納言の傳の事で考る陸奥國平泉衆  
達家ち大納言か納言かどつての名とてそのことと在り十八  
歳計ひ傳と左母のじびて町よりや晴雪ひいてこそゆゑす  
ううきしよれぬれのむかわせそやあけじ、

### 古内村

里長 長助

本ト古ル内ナヒヒト近キセトシテ本ト文字シテ有フ

享保日記家員十五軒雄勝郡前大川限ノ境寛冬ニ三年都奉令  
新古内村新田村家入文ニ見えテ此邑七町計南ノ飲食川

流ミ

### 神社

#### 新山大權現

祭日 九月九日 別當増田村修驗圓滿寺

#### 神明宮

祭日 四月十六日 別當 因

#### 稻荷大明神

祭日 九月十六日 別當 因

### 田ノ字

#### 前田 後田 之塗い田

新山田 鈴原田

新山田 神田

沼ノ上 ヒトモ沼

水後 リリ氷

うち田 沖田 柳の下

木村 じよじ

家貞十三戸 人數五十七人 馬貞三足二

諸山大林坂

馬貞

鞆

諸古内村 槙田村客入多サ里ミニムシカニテナシ  
草野日吉家貞十三種並相塘諸大川頭貞至多被

本イ古内村水也セシテナ本ノミテヤ良くア

古内村

里長

易世

新闢村

里長 利友衛門

新闢ハ闢を湯音小ナツテ 壇の事シメカリア回名秋田郡  
大久保支郷よりア 新闢ト唱ニ

神社

八幡宮

祭日 八月十五日 別當修驗貴福院

白山姫社

祭日 四月八日 同

日神明宮

祭日 四月廿一日 同月三十日出 十五

田字地

八幡野 安久戸水後

風雲社

貴福院

歴世寶永二年正月廿日セノニ

威徳山貴福院開基と慶安年中文來坊と申ス元禄

年中佛刹回禄<sup>テラ</sup>にてニ三四世の間積<sup>タマシマツリ</sup>て來りて

立世曰中興，立世曰中興五世山應寶永二年酉月廿七日遷化  
六世元貞享保二年丁酉十月廿四日化 七世快傳明和

九年壬辰安永元年八月廿日化八世宥興享和二年壬戌九

月十日化 九世永典文化十一年甲戌七月二十日化  
十一世

當位宥隆之

人言

中  
下

大文苑也。其學子之風，一脉相承，不絕如綫。

龍閣林  
卷之二

新古内村 里長 仁兵衛

里長 仁兵衛

郡邑記小家貞四拾一軒雄勝郡山名崎村手前大川三十六境二

神社

八幡宮 祭日 八月十五日

神明宮

稻荷明神  
冬至日  
同日

田字

お不<sup>ト</sup>せきそひ 上河原 あそ<sup>アソ</sup>けら 沼の<sup>ヌ</sup>、

八木さひ  
塚のやま  
蕪蔓イモヅル  
あいや

乾揚田

總家貳十八戶 人數百八拾八人 馬十九足 二

給公貢入達良饋信

主釋迦國主九日之禮

公奉尤見其事

舊通之

北極耶

是次也

主門坐

月日之主

主門坐

主釋迦國主

主門坐

車國宮

余日

地主

八都宮

余日

地主

腰河

余日

地主

腰古田村

余日

腕越村

里長 市左工門

主之子多石也主之子傳名鈔六腕  
而主之多しきり享保郡邑記云腕越村家貞十三  
軒左吉開村家貞十三軒寬永九年多賀屋左兵衛開  
て唱村麻當開村同十五軒延寶三年多賀屋左兵衛真崎  
兵庫開生唱之是えり 支仰麻當開村古十五軒 今七戸 龍吉開村

五十三戸

神社

主釋迦國主

神明宮 龙吉<sup>イシマツ</sup>でこ<sup>イシマツ</sup>村<sup>イシマツ</sup>余日六月十六日別當圓福寺

主伊奈利明神社 麻當<sup>開</sup>村<sup>イシマツ</sup>余日九月九日別當圓福寺 千手院

主立郎兵衛稻荷明神立郎兵衛稻荷也少次<sup>シモニ</sup>ノ神<sup>シモニノカミ</sup>余日四月十日別當圓福寺

沼館小鎮座<sup>シモニ</sup>木門野の神<sup>シモニノカミ</sup>余日四月十日別當圓福寺

余日四月十日

水神社壇田村の麻當山の内小座ミサカ祭日四月廿日別當亀田千手院山  
根小岩切カツカツ水通スル一角堰イヌカツトシモ一角坊イヌカツトシモ山仗ヤマヒサトテ水田の  
事モノ小手コハシアリ此堰を壅タマシト田佃タツクリ及タマシ其一角坊の舍退轉後タマシ  
亀田千手院仕タマシトハ古トタマシ一角坊イヌカツ別當タマシ

麻當開邑ハ一角坊イヌカツ次男齊藤市左門タカハシ祖チホ創タマシ之タマシ

田地字

南ミナミ北ヒガ西シロ東ヒガ

絶家員廿九戸ミナミ人員百廿九人ヒガ馬貢十五疋シロ

里長 原兵衛

上亀田村 里長 源兵衛

本郷ミタタカ亀田カタタカ亀田カタタカ小多コトコト名切ナメカツ此村  
小手院コハシ修驗者スケク含ミム枝ハラ仰アシタ稻葉村イナヒタ上開合村カミハゲハ鷦野櫛村サザニハ半助村  
桶場村カタハシ平庶村ヒラシバ澤口村ツバカ亀森林村カタモリ倉狩澤カマシハシタ小村コトコト退轉タマシ

神社

神明宮亀田村カタタカ祭日六月十六日別當千手院  
正一位福荷大明神カタタカ祭日九月廿日別當同  
愛宕社カミタカ澤口村ツバカ山上カミ祭日六月廿四日別當並タマシ同  
八幡宮カミタカ上開合村カミハゲハ祭日八月十五日齋主セイシウ小原治久

稻荷明神社 平麻村小鹿  
齋主 玉壯少翁門

子安觀世音社 楠  
トヨタケル

齋立勘之亟

田の字地

箭作香滿塲

寶池谷地

虹澤ノ不外不經塚ア此經塚セテカシテ四ノ梵  
字書トシ小石の山シテノアシニ僧の某經セテ塚トシケレ  
女神森男神森少々御神ニモテ陰陽ニ柱リ清  
神の神拂ト冒小森ニモテ此地小家ナムアリテモニモリ  
出テテニモテ龜森村トシ倉狩澤のうちアシテ神ア  
龜ト材名小ナフ一唱ミ忍事ナト傳訓未小カヌニ寔テ不神

義通（日本記小毫石、郡守書也）傳名鈔小神石、郡守書也

りきてかまけり御大キテ御枝を斬りて承り此花を  
トリ族のうちサツに人馬を給へとあらわしめぐつ  
せ緒との笠を掛へ金剛杖をつきみて出へるとき齡ハツ  
まの三相様の枯枝のまぶりを杖ト一茎がくわがじ東を  
望み客僧達すあまびに拂とあるをかく折み奉り給ふ  
まゆこち林命朝夕かゑつまくとて御事はくと  
してまくふりの杖をうちかてうしめもを注げば居るが  
人このほんばの杖を擲ミリシカの刃小こゝで生れ  
うちかぶれや翁ちつ曲耳すもす入日さらば償<sup>オイダニ</sup>給<sup>タス</sup>シ其よき  
白銀<sup>レバカホ</sup>の孔<sup>ヤ</sup>一貫を後庭<sup>アヒタ</sup>もかくおいて翁もあふれ翁<sup>ウラ</sup>  
見じあら<sup>キタナ</sup>の花盃入<sup>アヒタ</sup>もむほき丈<sup>ハ</sup>ま、一貫文のあら<sup>カ</sup>の泉で

出せハ翁<sup>ウラ</sup>うら<sup>カ</sup>錢幣<sup>カ</sup>其寶<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>うけ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>至<sup>カ</sup>  
もく<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>バ武藏坊<sup>カ</sup>今一貫<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>じくぐの山伏<sup>カ</sup>是<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>價<sup>カ</sup>  
田<sup>カ</sup>地<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ね<sup>カ</sup>ば<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>うきあ<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>じ<sup>カ</sup>  
三貫<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>腰<sup>カ</sup><sup>タカ</sup>を折<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>枝<sup>カ</sup>を翁<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>うち<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>けて  
山陰<sup>カ</sup>ふ去<sup>カ</sup>反<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>もあ<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>翁<sup>カ</sup>家<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>と高岡<sup>カ</sup>も  
の<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>翁<sup>カ</sup>家<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>と高岡<sup>カ</sup>も  
三貫文<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>錢<sup>カ</sup>古木<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>枝<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>わ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>枝<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>木<sup>カ</sup>の  
股<sup>カ</sup>から<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>來<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>看<sup>カ</sup>語<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>義<sup>カ</sup>住<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>給<sup>カ</sup>て  
そ<sup>カ</sup>神<sup>カ</sup>桜<sup>カ</sup>木<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>神靈<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>この<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>  
き<sup>カ</sup>給<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>貫<sup>カ</sup>枝<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>詠<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>  
の今一世<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>強<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>枝<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>卷<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>セ<sup>カ</sup>

家貲八十四戶 人員百四十人 馬貢立十足

人貞百四十人

馬貞立十足

下龜田村

里長

立於右衛門

上巣田も凡同じ色に近き小保正で別れあれども未だ

下町村 在城村 館屋敷村 金野川村 三條村

阿弥田村之

神社

稻荷明神社 金野川上彦 夏至日四月廿日齋主長左門

田字地

在城平素端道祖神

香山集

木翁山香曰且取守古ト此色小あつし今ミ明澤村ミ入

家貞四拾九戸 古人員二百十一人 馬廿一疋

杏昌者

五加、平添村

田子村

前原町村、金野川村、水谷村、高野村、

新井村

門前田村

下西林、五加村、高野村、金野川村

上喜田村、下喜田村、中喜田村

下喜田村

喜田村

明澤村

里長

吉太郎  
久右衛門

明澤古名赤澤、享保日記小明沢村家貞廿六軒

下町村同二軒、館屋敷村同四軒、閑合村同拾七軒、金野川村同立軒、先六毫田分計住居三十一居、寛文年中明澤村地頭横手給土石井弥左門忠進開いたる故明沢村者入込其附札云、先年明沢村地形内毫田村より開いたる村居立處。

忠進開相成明澤村百姓立軒移り由毫田村より取立金野川村間此未明沢村<sup>ニテ</sup>錦野川<sup>ト</sup>唱へ不申明沢村<sup>ト</sup>唱<sup>ル</sup>様可仰付候<sup>ク</sup>之え、至枝郷澤口村家貞七軒を定<sup>ス</sup>今<sup>ト</sup>明沢村

家貞三戸、閑合村同十六戸支郷、金野川村同六戸支郷あり、館屋敷下町澤に此三村退<sup>ム</sup>轉<sup>ヒ</sup>枝郷<sup>ヲ</sup>、庭合金野川二村の事

明澤山獄トテ高山アリ本ト赤渓トセケア明沢ト古ヘ飯吏リ極ム  
处ヤ阿氣安祁津カニ處ヘ山ニ山獄トの岩窟小径トテ  
シ高源アリ房中山首物語山本郡盛同修院者  
華藏院縁起小阿計徒磨阿  
計留磨阿計志麻モハ日高見山ト住ト事見エテ此明  
澤山の舊ニ古城の源アリモ寶音寺の源アリ池ウタ一ツセ  
此池水涸不碍出アリ石面小充楚形アリ四時順收ト中リ  
多々右小山賊降伏尤小邦内豐饒アリ峯小藏王權現主  
セ北小地獄澤アリカウテ六通の願天賀放光王金剛願金剛  
寶金剛幢金剛悲苦の菩薩アリ急流沢ロナハ大悲觀世音  
ケ安置ヨリハ山後ノ暗川深キ年ノ鬼神往リテ侵ノ優婆  
塞鬼神ア降伏ト藏王の神形ア齋事給アリニモ女人の會ト  
セ

忍ミ林示リ男リ酒肉ヲ禁テセ日ノ齋大不景ト清淨ヨリ峯ニサバ  
シテ山獄積進不計トテ吉野アリ山中人ニ金峯山  
大權現トモリモ之全化僧歎ホクシカモ山中宿泊アリモ世  
主所深キ嘆ニ莫ニ此ニハ山北ト高山の第一の山也高之或說小  
字アリ竹山の仙人名馬モ御嶽山の塙湯彦小畠ト給ハ此龍馬  
小うちナシニモハガツヤダラシの駒ア放チヤリ給ヒ妙ト駒ノ巖ト  
シテ馬糞給ヒ地モ馬糞モサリテ  
印ノ流の不動明王ヒト此流の中モ朱搗音アリテ此村ト豊  
饒アリ人向ノ流の山宗ア不動尊ア御多シハ此即キモハ此の  
中モアキアリ朱搗音止テ印流ハ谷のニテ材レ田佃の  
らだむの如ク確ニ窪メ申ムテ

藏王權現神像 大和國金峯山の砂金ぎりて神頭斗鑄ぐ  
内小叔て理元大師の由手つう作り繪ふり

同神木像一軀 大治二年丁未六月十八日 理元大師、御作  
觀世音立番札所 教圓阿闍梨、作

峯カミからをふりてハヅつドハツトドからわれ 永樂七年三月十七日  
佛アラシいほゆの日  
さえとくも六郎のす巡アマツルとけめし傳と宇治物語ミヌエイと

多門天王一軀 閻魔王一軀 脱衣婆、像共圓  
仁大師の作

棟コトコトれ小千時寛治三年己丑九月十六日 沙門當山坊主

法印全化

くりゆきゆき宮古の山カミヤマバ 一遍上人奉仰共小  
そよ風ソヨウフウ月  
熊野牛王一遍上人自筆シテヒツて書

大峯山 湯殿山此兩社土小廟を埋む年号あるも某人  
の建立と云ふ事カタマリとあれば

奉造立藏王大薩埵一宇沙門禪性

元亨元醉七月十八日

施力丹後

此兩社の社地の土中より堀カミナリ出アマツルまゝその如く鎮上、土中に以ひ  
奉納法華經カクイジンせ六卷 武藏坊辨慶ブサカウ度交自筆

文治三年六月八日

油盈坂アラヨコりつこよ高山カミヤマ在る名ニ當山カミヤマのぼらじき一坊  
弁慶月參アマツルすと堂年カミヤマ四下アマツルて半燈ハーフランプの行アマツルて食アマツル此坂アラヨコ  
入りつゝ掌ハンドの油オイルをこぶすてまぶすとあり

梵字石經一字一石法華一部

月泉奉納之

應永十二年五月一日

やまとひづるくにゆきのまお母の法の拵ひよ 月泉

奉造建金峯山藏王權一字法印得岩

願主 弥人  
禪光禪門

永享立五月三日

奉樹金峯山額天長地久祈所

法印得岩

同八月廿日拜領之

藏王權現、額ハ院家金剛王院前大僧正

真輪

永享立年丑五月三日

當山舊例にて正月十八日山勅より登山ス

立月十八日

山焚祭 九月廿八日大祭ニ同廿九日山仕舞にて國家安全  
村民豐樂の沛祈祷あり

仲夏の間行幸 天下泰平立穀成就、護摩修行

不動尊金佛一寸八分弘法大師作道場本尊懶綿光内龕

さりすもゆる

正觀音一軀 小野寺式部義行奉納多武峯の觀音

トソ

奉建立弥勒堂一字 別當 得岩

奉建立金峯山藏王堂二字

鬼門鎮護城境堅要

天文元年四月日 土井道近 別當 能定防

奉納神鏡一幣 武威長運祈慶

開口能登守道行別當梅分坊法印全體

奉立額開田成就祈延此崎山後仙北上浦之内赤沢村肝煎

卷之天正十八庚寅二月六日

古赤澤分毫田村肝煎赤澤分毫田村肝煎兄

下居社地  
古赤澤分毫田村肝煎赤澤分毫田村肝煎兄

御山社地山頂上之外流百間四方極坂幅三間極東西

十八間南北十七間極

孫勤社地外七邊社地席換地役八木藏人  
奉建立席堂開田成就祈延山谷掃部

元和元年八月四日

此一卷外小くありて御事

元としのものうちをうそふ

舉てその改めを

別當光明院

金峯山大權現明澤山獄小齋

まよ

余日九月十九日

此ゆゑ前半つばらにあらへる別當光明院

澤口觀音

祭日三月十七日

別當同前

箭倉松山神

祭日四月十二日

別當共同

小泉山山神

祭日四月十二日

齋主丹吉衛門

堂沢稻荷社

祭日九月十五日

齋主時兵衛

神明宮村中鎮座祭日六月十六日

齋主時星長

金峯山主光明院歿世

當山坊主古より三十三坊多し弘治年中より下坊廿二房

を減下天正年中より下坊十一坊と減サセ

開祖天奎全化天仁三年己丑五月十七日八十七歳遷化

二世翁仕現衆

大治四年己酉六月八日 五十八歲化

三世翁峯率龍白年中壽永元年壬寅四月廿日九十四歲化

四世峯永白天治秉三年己亥七月廿日五十一歲化

五世翁雄明文建久九年壬午三月十三日行年不知

六世大雄善角貞應元年壬午七月朔日化行年不知

七世通山清景寬喜二年庚寅六月十八日化

八世翁嶽海了寬元四年丙午四月九日化

九世宥二天全仁治二年辛丑十二月三日化

十世宥作現光文永十年癸酉十一月七日化

十一世翁智正白永仁五年丁酉正月廿八日化

十二世翁經善性元亨二年壬戌八月八日化

十三世山迴梅山石脣應三年庚辰六月八日化

十四世連山前岩貞治六年丁未七月廿日化

十五世山了峯岩應永八年辛巳二月六日化

十六世宥住文樂應永三十三年己六月廿日化

十七世中興金常得石寬正元年庚申十月八日化

十八世宥音得真明應七年戊午十二月十六日化

十九世山圓正二永正十四年丁丑二月廿九日化

二十世天真能定永祿九年丙寅三月廿日化

廿一世全鉢梅介慶長八年癸卯八月廿七日化

廿二世紅實延覺寘承十二年乙亥五月朔日化

廿三世宥道峯順延寶四年丙辰五月十九日化

廿四世再中快峯林正

正德三年癸巳二月二日化

廿五世涼永岩本

寶永七年庚寅十月廿五日化

廿六世宥涼光榮

享保十四年己酉九月廿日化

廿七世宥甚大教

安永六年丁酉九月廿四日化

廿八世宥永峯春

文化六年己酉七月十三日化

廿九世宥榮正善

文政二年己卯三月廿八日化

三十世當住安寺善坊

香最取寺

木彌山香最取寺八曹洞汎考相模國少田原海藏寺末院開山大洲梵守和尚大永五年乙酉八月廿四日遷化

二世照庵祥周和尚十世達山列巖和尚世子回祿丁遷化  
年月廿二日三世牛祖和尚 四世幻宿榮茂和尚 五世  
靜室禪林和尚 六世持水岩智順和尚 七世南山並川  
和尚 八世審列祖範和尚 九世雷庵幽巖和尚 十世達  
山刀彌巖和尚 安永五年丙申九月廿日化 十一世治寶萬明和  
尚寛政八年丙辰十二月六日化 十二世活岩卓禪和尚明和三年  
丙戌八月廿二日化 十三世明宗德禪和尚明和六年己丑二月  
廿四日化 十四世不照破鏡和尚寛政三年辛亥十月廿日化  
十五世靈嶽瑞苗和尚寛政四年壬子正月廿八日化 十六世  
壽嶽良山和尚寛政六年甲寅五月廿二日化 十七世全應

正月廿日化 十九世秀了岩和尚文化立年丙辰正月廿日化 廿世

傳附天壽和尚文化九年壬申四月廿八日化 廿一世智覺大亮和尚  
文化九年壬申五月十九日

陸奥瞻澤郡衣川正山寺當山香最寺末寺

田地名

北野 ものぶ 平ラ林 館中さき 惠庵中

追ひ教 ル 塚、腰いのくの平 比良の平 蓮基野

堂之前 山の名

山館 古レ館 御土館 袋澤 や鳥ハ澤 山嶽比良 冈後端  
少松倉 姬小臺 未聲森 薬師長嶺 清水ヶ臺 金堀リ澤  
大鉢森 年代森 小鉢森 割ッタゴ あまのぶ

斬比良 地獄澤 空澤 母澤

古樹奇木

箭倉松 姬松 冈後端の滝ハラ在

龍骨由来

明治の技師 金野川村木切じ一平奉りふ人ウラ増田村宇  
山中李吉家切男ハ此半奉と無術の師ト頼みてものル一品の  
巻に近き世ヨド村山中が森小龍の鏡骨カミツクニアモウナリテ  
亘一尺計中の厚き知ル一寸ハ猶ハガリ一寸リありきよ  
此後音半奉翁翁貰ひて之半奉翁を葉ふふ無谷三郎  
烏湖へ慶安の三月ノ一サマノサマノ地小瀬で修まリま

ニモウケ、半奉為の後立烏湖<sup>スエ</sup>モ此色ニ在リ

